発行日　2014 年 6 月 20 日（隔月 20 日発行）　通巻 309 号

日本国際ボランティアセンター　会報誌
トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

Trial & Error

No.309
July-August 2014

特集

悩み、迷い、だからこそつながりを

写真上：2014 年冬、南相馬でも記録的な積雪を記録。仮設住宅自治会がボランティアを募り、住民による除雪が行なわれた。
写真下：西町第一仮設住宅のサロン。電動マッサージ機が住民に大人気。サロン管理者の松本さん（右）が優しく利用者に声をかける。

JVC Japan International Volunteer Center

特集

悩み、迷い、だからこそつながりを

東日本大震災から３年が過ぎた。いまもまだ不安を抱えながら、県外に移ったり仮設住宅に入るなど避難生活を続けている人は多い。JVC は福島県南相馬市において仮設住宅でのサロン運営の支援を続けているが、その活動を続ける中で福島県の内外で多くの人の話を見聞きしてきた。今回はサロン支援活動の報告とともに、そうした人びとの声を多く紹介したい。（編集部）

仮設住宅内の集会所で開かれているサロンでくつろぐ住民のみなさん。
(C) Natsuki Yasuda / studio AFTERMODE

地元の力と共に
～南相馬市仮設住宅のサロンから～

震災支援担当・南相馬　白川 徹

■孤立死を防ぐために

ＪＶＣは二〇一一年四月に福島県に調査に入り、南相馬市からの要請を受け災害ＦＭ（臨時災害放送局）への支援を始めた。これを続けつつも、ＪＶＣは被災者への直接支援の可能性を探っていた。

当時、ＪＶＣは仮設住宅（以下、仮設）において阪神・淡路大震災の時のように孤独死が起こることを警戒していた。阪神・淡路大震災においては、仮設・復興住宅での孤独死数は千を超えている。南相馬市の仮設の場合、若い世代の多くはすでに市外に避難しているために、仮設住民の高齢化が著しい。また、もともとは三～四世帯が同居して暮らしていたが、高齢者が家族と離れて仮設で暮らすこと自体に対する不安もあった。

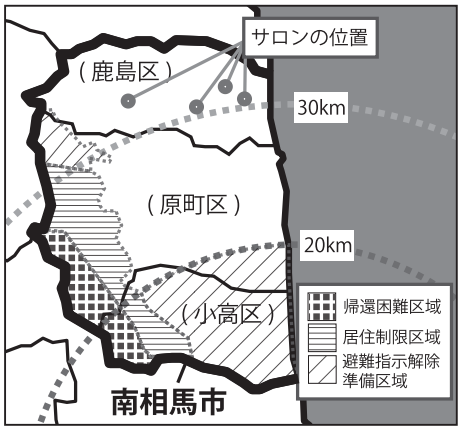
加えて、コミュニティが細断されていることに住民は不安を覚えていた。南相馬市など東北では、住民は「行政区」という百世帯程度の集落単位における強い相互扶助的助けあいの中で暮らしていることが多いが、仮設住宅が割り振られる際にそれまでの行政区は考慮されなかったからだ。見知らぬコミュニティの中での避難生活は、得てして孤独を招きやすい。ＪＶＣの調査でも、「狭い仮設だと人を招き入れることもできない」「外で人と話すにもベンチすらないんです」という声や、「仮設に入って半年以上暮らしていてもお隣さんが誰かもわからない」という話が多く聞かれた。

調査を続ける中で、仮設での支援を行なっている地元の団体「やっぺ南相馬」※注①との出会いが、活動開始のきっかけとなった。同団体は仮設に設置されている集会所（三十畳ほどの建物、通常は施錠されている）を利用して、住民誰もが自由に訪れることのできる「サロン」を開いていた。サロンではお茶やお菓子を無料で提供。同じ被災者のサロン管理者が週六日常駐し、住民をもてなし、会話をする場を作っていた。サロン活動そのものは東北被災地で珍しいものではなかったが、月に数回開かれる程度が通常であり、専任の管理人が常駐して週六日開いているという点が極めて珍しかった。サロンには一日三十人程度の住民が訪れており、その有用性が確認できた。

ＪＶＣも同様の活動を始める可能性を模索したが、地域にとってよそ者であるＪＶＣが単独で仮設に入り、サロンを運営することは、あまり現実的ではなかった。住民や関係各所と連携していくためにも、信頼できる地元出身者が必要であった。

幸運にも、災害ＦＭ活動にボランティアとして関わってくれていた今野由喜（こんのよしき）さんという適任者を得ることができた。今野さんは当時、南相馬市小高区塚原行政区の副区長（現在は区長）を務めており、現地の関係各所との関係づくりというＪＶＣの弱点を補ってくれる存在だった。何より、厳しい境遇にありながら自分たちで地域を復興させていこうという強い気概に、ＪＶ

※注①・南相馬市内でのサロン活動は、「やっぺ南相馬」が 2011 年 8 月に寺内第一仮設でオープンさせたのが始まり。
サロンの必要性を感じた JVC は、2012 年度 1 年間、資金面や組織運営面で支援を行なった。



南相馬市の概況：

福島県南相馬市は、いわゆる「平成の大合併」で旧鹿島町、原町市、小高町が2006年に合併してできた比較的新しい街だ。3・11の震災では津波により約650人の死者/行方不明者を出した。原発事故以降、福島第一原発から20キロ圏内の小高区は「警戒区域（当時）」に指定され、現在でも日中の出入りしか許されていない。元々の人口は7万2千人だが、震災直後は多くの人が避難して1万人にまで落ち込み、現在は約6万3千人になっている（南相馬市ウェブサイトより、6月1日現在）。

南相馬市における区域指定は、現在左図のように「帰還困難区域」「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」の3つに再編されており、市の発表では2016年4月に除染の終了に伴ってこうした指定区域の解除が予定されている。詳細は内閣府作成資料「避難指示区域の見直しについて（http://ngo-jvc.info/1oLVp13）」を参照されたい。

C側から協力を願い出た。

サロン運営開始にあたって、継続的な運営基盤を確保するために今野さんに団体を立ち上げてもらった。苦境にある者同士、外から支援する者と南相馬とをつなぐという思いをこめて、団体には「つながっぺ南相馬」という名前が付けられた。この「つながっぺ南相馬」を中心にしながら、各仮設の自治会とJVCの三者が協議して運営方針を定めていく方針が立てられた。

■サロンが生みだすつながり

翌二〇一二年の一月、西町第一仮設住宅の集会所に第一号のサロンがオープンし、三月までには寺内塚合仮設住宅、千倉仮設住宅においても新たにオープンした。開始から二年目には四つ目のサロンを友伸グラウンド仮設住宅でスタートさせ、現在は四ヵ所になっている。

運営開始当初から仮設自治会と綿密なコミュニケーションを取っていたこともあり、サロンはだんだんと住民の間に浸透していった。サロン一ヵ所あたり一日に三十〜四十人程度、四ヵ所で月にのべ約三千五百人の住民が訪れている。

その運営を支えているのが、サロン管理者だ。仕事は利用者へのお茶の提供から始まり、イベントの開催、外部からのボランティアの調整、利用者同士の会話づくりなど多岐にわたる。運営開始時には前述の「やっぺ南相馬」で管理人としての研修を受けている。サロン管理者自身も、実は仮設住宅に暮らす同じ被災者だ。同じ境遇の人間が同じ目線で、家族のようにサロンの利用者に接している。

開始から三年目に入った現在、それぞれのサロンが仮設の暮らしの中に溶け込みつつある。朝方、仮設近くの菜園でひと汗かいた後にサロンでコーヒーを一杯飲むのが日課という六十歳代の女性がいたり、「編み物を習うのが楽しみで」と言って毎週決まった曜日に通ってくる五十〜七十歳代の女性たちがいたりする。普段は男性の利用者は少ないが、三〜四ヵ月毎に休日を使って自治会が主催する輪投げ大会には男性たちも大勢参加し、地元の大会で鍛えた腕を披露する。

「サロンに来るようになって、新しい友だちができた」「狭い部屋にいると気持ちが落ち込むが、ここに来ると話しができて気分転換ができる」と喜ぶ人も多い。また、「サロンに来ると管理者の人にお茶を入れてもらえるのがうれしい。自分の部屋でもお茶は飲めるが、『自分のためにお茶をいれて声をかけてくれる人がいる』というのが何よりもうれしい」という声もあった。

こうしたサロン活動において、住民のケアが第一義の目的である。しかし、サロンそのものでケアできる人数は限られている。より大切なのは、サロンを通じて人々が出会うことにより、住民同士の有形無形のつながり、相互扶助の関係が仮設の中で生まれていくことだ。その成果はだんだんと出始めており、住民自身が講師となって手芸教室を開いたり、大雪の日には住民らが自主的に除雪をかってでたりしている。また、仮設で生まれた歌のサークルが、デイケアセンターで慰問ボランティアをするような活動も生まれている。

隣に誰が住んでいるかわからないような仮設団地の中で、だんだんとコミュニティが形成されてきている。こうしたことが、当初目指していた孤独死の予防につながればと考えている。実際、サロンの効果だけではないだろうが、少なくともサロンを設置している仮設では孤独死は起きていない。

■全員が巣立つまで続けたい

当然、良いことばかりではない。仮設に暮らす人たちの多くは、旧警戒区域の小高区に自宅があり、少なくともあと二年は戻ることができない。その間、不自由ながらも仮設に住み続けるかそれとも新しい場所に移り住むかは、家庭によって事情が異なり判断も別れる。このところ、復興公営住宅への入居や新たに購入した家に引っ越すケースが増え始め、サロンでも話題になっている。見送り見送られることは、いずれにしてもつらい。サロン開始当初に今野さんが言っていた言葉を思い出す。「サロンには三つのステージがあります。まずは癒される期間です。そして自分の足で立つ地ならしの期間。その後、元気になって巣立っていってほしい」

協力者の今野さんは、仮設がある限りサロンがその役割を終えるまでこの活動を続けていきたいと話している。仮設に暮らす人の動きも行政の方針も、復興の動きそのものも見えにくい中ではあるが、この先も地元の人たちと気持ちを寄せあい最良の道を拓いていきたい。

幾千万の願いを抱えた「復興」

震災支援担当・南相馬　谷山 由子

記事に登場する方々

鹿島区在住：
　鹿①：仮設住宅の見回りを担当する県の絆事業職員
原町区在住：
　原①：市内で除染に取組む NPO の理事長
　原②：私設の子ども向け「ちゅうりっぷ文庫」主催者
　原③：植物（菜の花）除染に取り組む有機農家
小高区出身（現在は鹿島区や原町区に避難中）：
　小①：仮設住宅に避難している方
　小②：一度避難した千葉県松戸市から戻られた方
　小③：つながっぺ南相馬の理事長
　小④：仮設住宅常設サロンの管理者
千葉県松戸市：
　松①：原町区から避難されている方

■当事者としての試練

東北三県を揺るがした大震災から三年が過ぎた。復興の足並みにも違いが見え始めている。地震や津波の被害だけでなく、原発事故後の被ばくの心配や収束作業が続く原子炉を抱え復興の遅れが際立つ福島で、人々は今も復興の遅れと不安の中での暮らしを強いられている。

ＪＶＣが福島で支援活動を開始する際、相当の議論があった。最終的に合意した「原発の事故を抱える福島にこそ当事者意識をもって入るべきだ」というＪＶＣの姿勢は、ポジション・ペーパーにまとめられた。※注①

二〇一一年五月、ペーパーの完成に先駆けて南相馬市臨時災害放送局の支援を開始、翌十二年一月には仮設住宅集会所でのサロン運営支援を始めた。加えて、十三年には県外に避難した人たちへの支援につながるよう「原発事故子ども・被災者支援法」の基本方針案の見直しを求める緊急署名に賛同するなど、※注②中立な立場での関わりを模索し始めている。しかし、今もＪＶＣ内部での議論で「福島での活動は、人々をその土地に縛ることになりはしないか」という声はあがり、試行錯誤の中で活動が続いている。

これまでＪＶＣは、国境を隔て一方で避難した難民、一方で村に残った住民を支えたり（カンボジア）、地域の課題を克服しようと懸命に取り組む住民を宗教や民族を越えつなごうとしたり（パレスチナとイスラエル）、子どもの描く絵の交流を通して心情的な壁を取り払う（北朝鮮と日本）努力をしてきた。今、ＪＶＣは、自国の『分断』に直面している当事者として南相馬に向き合っている。私たちの試練ともとれる活動を取り囲む状況を、今年に入ってから南相馬の方々から伺った話を紹介し、会員や支援者の方々と共有したい。

■除染をしても拭えない『お金』がもたらした傷

「震災後に市外に避難していた人が、『南相馬の人？ お金をもらっているんでしょ』と同じ福島県の人に言われたことが、今も忘れられないそうです（原①、上枠参照）」何も悪いことをしていないのに差別されたことが、避難の現実以上に重くのしかかってくる。「どうせなら、補償金を個人ではなく行政区や地域のある一定のグループに出してくれていたら、地域全体で除染に取り組んだり暮らしをどう建て直すか話し合うこともできた」と、これまでも多くの人たちが口にするのを聞いた。

家庭の中でも「ある母親は、（仮設の）家に一日中はいたくないのに『補償がもらえなくなるから仕事をするな』と言われたり、『子どもに父親が家にばかりいて働かない姿を見せたくない』と言っていた（原②）」といった葛藤が起きていた。

「『（原発に近い）あの区から避難している人は、家（仮設住宅）に居て好きなことやってたってお金が入るからいい。俺たちは、同じように津波にやられても何にも補償が出ないから、全部自分たちでやんなきゃなんね』と話すのを聞くのがつらい（鹿①）」

同じ仮設に居ても交わることのない住民をつなぐのは、並大抵のことではない。「避難先で幸せに暮らせるのであれば無理して戻ってこいと言う必要もないし、苦労しているのであれば安心だから帰っておいでといってあげたい」「（市内外で分断された状態での）対話は、今は無理でしょう。お互いの暮らしがどうなっているのかを、お互いの暮らしの環境がわかるようなかわら版（情報誌）の交換などを通して、時間をかけて理解しあうことから始めるといいのではないかと思います（原①）」

■政府や行政だけを頼ってはいられない

「十年、いや二十年先の南相馬を考えるために、チェルノブイリを見てきたい（原③）」と、主な収入源だったコメ作りが断たれハウスでのトマト栽培も縮

※注①・「福島第一原発事故に関する JVC の考え方をまとめました」→ http://ngo-jvc.info/KghRhR
※注②・「子ども・被災者支援法の基本方針案の見直しを求める緊急署名に賛同しました」
→ http://ngo-jvc.info/18Cs65B

■千葉県松戸市・東北交流サロン「黄色いハンカチ」。昨年２月にスタートし、避難した方々の交流の場となっている。

■原町区で震災後に自宅を開放し絵本の読み聞かせや子育て中のお母さんの相談を受けている「ちゅうりっぷ文庫」。

小した中で、それでも〝生命〟や地域環境を守るためにと採算抜きで農地の植物除染を試みている有機農家がいる。この二月には、地元の有志や研究者とウクライナを訪問した。どこの助成金も取れず、すべて自費で賄ったそうだ。

農地以外の除染も、困難が伴う。住民は震災前よりは高い放射線量とどう付き合っていくか、模索が続く。「歩きながら放射線量を計りその結果を線量マップとして公表していますが、ホットスポットの扱いには特に注意を払っています。そうしないと、ただ怖がらせてしまったり行政や東電に圧力をかけるように思われてしまうので、道路であれば避けるか走って通るなど長い時間そこにいないように勧めたり、行政に汚染土の処理の協力を依頼し年配の住民で土をはがすなど、自分たちの手でできることから進めています（原①）」

二〇一六年四月の除染完了と避難指示解除（目標）を待つ小高区で、この五月津波で失った公会堂の落成式を迎えた行政区がある。ＪＶＣと協力して仮設でサロン運営をしている団体の理事長が区長を務め、休む暇も惜しんで区民や行政との協議、資金集めや協力団体・地元の工務店とやりとりし建設実現のために奔走していた。「いろんな意見の人がいる中で、まだ帰るかどうか迷っている人も多い。先はわからないが、地域の再生について語り合える場を作りたかった（小③）」民間で建てられたこの公会堂が、震災後の小高区で最初に建てられた公共施設になった。

■帰りたいのに帰れない

「やっと原町に土地が買えそうです。小高には帰れないけど、仮設を出て新しい生活を始められると思うと区切りがつきます（小④）」三月にうれしそうに話してくれた仮設のサロン管理者を務める三十代の女性が、最近になって「地主さんがやはり手放さないと言いだして…。また振り出しに戻ってしまいました」と報告してきた。理由はわからない。再び先の見えない暮らしに戻った彼女の表情が、前のように固くなっているのがわかる。

サロンを訪れた六十代の小高区の女性は、「自宅は地震の影響もあまりなかったので、改修もすぐにできて日中は帰っています。でも、おばあさんは自宅に帰れたとしても周りの人が帰ってこなかったら家に一人きりで寂しいからいやだって。仮設の方が新しい友だちもできたから、こっちの方がいいって（小①）」以前のように声をかけ合う隣人がいない自宅は、帰る先とは言い難くなっている。

千葉県松戸市に避難している六十代の女性も、「原町の自宅は線量が高くて一時的に帰れても定住はできません。しかし、原発から三十キロ圏内ということで補償は切れてしまいました。※注③生活の再建の計画も立てられずにいるのが、本当に辛いです（松①）」と語った。震災前は当たり前に帰る場所だった自宅に、今は帰れない。

■帰ってきたものの、荒れ果てていく家を見続けるのはつらい

千葉県松戸市にある、「黄色いハンカチ」という東北からの支援者を応援するサロンの代表に、南相馬にこの春戻った方を紹介してもらった。三十四年間原町区の幼稚園に務めたという七十代のその女性は小高区の出身だが、戻ってきたのは職場のあった原町区だ。市内を歩いていると、教え子や保護者から「会えてうれしい」と声をかけられるという。

同居していた息子さんたちは県外の避難先での暮らしを決め、小高の自宅を引き払うと言っているが、あきらめきれずに小高区の自宅に行ってみるそうだ。「息子たちと動物を飼っていた小屋も、いつも花をきれいに飾っていた居間もそのまま。だけど、ネズミが入ったりして随分と荒れてしまいました。最近は、行っても周りに誰もいないから怖くなって、一時間で原町に戻ってきてしまいます（小②）」知り合いがいる街に戻ってきたものの、自宅とその近くには誰もいない現実がそこにあった。

■福島の「今」をこそ忘れてはいけない

二年前と違って被災地への関心が薄れた東京に戻ると、それだけで疲れがどっと出る。節電でエネルギー問題を考えた日々も消え原発再稼働まっしぐらの政府を戴くこの街は、どれだけ震災・原発事故から学びを得たのだろう。また地震が来ないと誰が言えるのか。逆境にありながら再生に挑む南相馬の人たちからこそ、私たちが学ぶべきことは多い。助ける相手としてではなく、耳を傾けたくなる相手として。

※注③･東電からの損害賠償金は、原発からの距離半径 20 キロ圏内の警戒区域（当時、小高区と原町区の一部）と 30 キロ圏内の緊急時避難準備区域（同上、原町区）には支払われたが、30 キロ圏外の区域（鹿島区）には支払われなかった。その後、後者の 30 キロ圏内への補償は 2012 年 8 月に打ち切られ、こうした区域指定も何度か再編されている（3 ページ上図参照）。

東京事務所（25 名）

後列（8 名）左から:池田、平野、細野、山崎、長谷部、下田、樋口、高橋
中列（6 名）左から：佐伯、寺西、広瀬、加藤、大村、白川
前列（5 名）左から：並木、磯田、谷山博、稲見、宮西
左枠左列・上から：横山、西、小野山、藤屋、谷山由、渡辺

谷山 博史（代表理事）
戦争する国になるのを止めたい。一日一種類は自分で作った野菜を食べたい。

磯田 厚子（副代表）
（多忙につきコメントをいただけませんでした）

長谷部 貴俊（事務局長）
読みかけの『カラマーゾフの兄弟』を読破する。息子＆娘と毎日体幹トレーニング。

細野 純也（事務局次長）
今年こそ『本職』方面で結果を出す。

山﨑 勝（カンボジア事業担当）
生きる原点に返って、明るく、楽しく、元気よく。

平野 将人（ラオス事業担当）
パンチングボールをダカダンダカダンとプロみたいに叩けるようになる。

渡辺 直子（南アフリカ事業担当）
私にとって何より難しい早寝早起きと日々の運動で、体重を JVC に来た当初の値に戻す。

小野山 亮（アフガニスタン事業統括）
現地スタッフの「クリケット」ネタについていきたいなぁ。

加藤 真希（アフガニスタン事業担当）
朝、出勤前にアフガニスタンのパシュトゥ語を勉強する習慣を今年も毎日続けます。

樋口 正康（アフガニスタン事業 / 南タイ事業担当）
長年やってみたかったダンスに挑戦する。

谷山 由子（震災支援担当・南相馬 / イラク事業担当）
年間 3 分の 1 を別居してはや 2 年。元気になったツレを横目に南相馬通いに励みます。

西 愛子（アフガニスタン事業保健アドバイザー）
知人に依頼している修学旅行生民泊の農業体験受け入れをできるよう頑張りたい。

佐伯 美苗（スーダン事業担当）
整理整頓、棚卸、在庫管理。

並木 麻衣（パレスチナ事業担当）
心身健康で赤ちゃんを迎える（7 月出産予定）＆将来の子連れガザ出張の根回しを。

寺西 澄子（コリア事業担当）
韓国の友人と今更ユルく文通、流行語についていけるようにする。

中野 恵美（イラク事業担当補佐）
10 年ぶりに非常勤で「復帰」して 2 年目。イラク事業を軌道に乗せるべく頑張ります！

白川 徹（震災支援担当・南相馬）
今年の 3 月に結婚しました！ 家庭と仕事両方の充実を！！

横山 和夫（震災支援担当・気仙沼）
一年半の浪人生活でだれきった生活を立て直す。

藤屋 リカ（海外事業担当）
タブレットは錠剤としか想像できなかった私。使いこなしてモバイルオフィスを実現。

高橋 清貴（調査研究・政策提言担当）
お金を使わない生活を始める。まずは一週間。

池田 未樹（経理担当 / イラク事業担当）
ウクレレ始めました。弦 2 本少ないやん楽勝 !? 週末に公園で恋人と仲良く練習中。

稲見 由美子（経理担当）
次男の体重が増えるような食事づくりを心がける → 私より重くなるように !!

広瀬 哲子（広報担当）
サボっていたランニングを復活！その後のビールでカロリーは±ゼロになるけれど。

宮西 有紀（会員・支援者担当）
ハングルが読めるようになること！まずは、めくるめく子音の世界を楽しむ…。

大村 真理子（カレンダー事務局）
早起き。たっぷり朝日を浴びて元気に仕事に！

下田 寛典（コンサート事務局 / タイ事業担当）
JVC コンサートで満員御礼が出せるようにする。皆様お誘いあわせの上ご来場ください！

JVC STAFF 2014

今年度の抱負を聞きました

左から：テロアット、シキム、ブンルゥーン、コン、サリー、チャントーン、ソカー、太田、ソマッチ
左枠：ブンヒエン、コニタ

坂本 貴則（現地代表代行）
JVC カンボジアのスタッフがやりがいを持って働けるような環境作りに力を入れたい。

ポーク･コン（CLEAN プロジェクトリーダー）
家族の健康を祈っています。また、JVC でチームと協力し、農民へのトレーニングがうまく行くよう努めていきたいです。

ミエン･ソマッチ（CLEAN フィールドスタッフ）
家族の健康を祈っているのと、村の人たちの生活が良くなるよう、仕事に努めていきたい。

ロス･ポンロック（CLEAN フィールドスタッフ）
自分を高め、自分が持っている知識を農家と共有し、生活向上に貢献したい。

セアン・サリー（CLEAN フィールドスタッフ）
チームと協力しながら、うまく情報共有し、プロジェクトの成果を出していきたい。

コーン・シキム（CLEAN フィールドスタッフ）
JVC で働き、周りのスタッフから学びながら自分の能力を高めていきたい。

モーン･ソカー（CLEAN スタッフ / 農場担当）
農場での実践研修を増やし、農家の役に立ちたい。

太田 華江（環境教育担当）
もっとカンボジアの人の生活を知っていきたい。クメール語を一生懸命勉強する。

ソック・チャントーン（環境教育プロジェクトリーダー）
奨学金をもらって海外で勉強したい。

セン・テロアット（環境教育スタッフ）
新しいことを学び自分の能力を高めたい。困っている人を助けるために最善を尽くしたい。

ヒア・ブティー（環境教育スタッフ）
英語をもっと勉強する！

ソム･ネアリー（資料情報センター（TRC）トレーナー）
他のスタッフとよい関係・よい雰囲気を作る。家族のこともう少しケアしたい。

イン・コック・エン（TRC 司書）
JVC の給与は低いので、自分の生活を支えるための小さなビジネスを起こしたい。

ヘン・チェンガウ（総務担当）
JVC で長く働きたいのでスタッフとよい関係をさらに築きたい。また商売をはじめ、生活をよくしたい。

ケオ・コニタ（会計担当）
JVC のスタッフが生活に困らないよう、より多くの支援が集まることを期待したい。

サ・シネン（清掃担当）
このままでは生きるのが大変なので、将来小さな商売ができるよう準備したい。

パウ・リッツ（CLEAN 運転手 / 総務補佐）
より安全運転に気をつけて、収入が増えるように願う。

プム・ブンルゥーン（運転手）
給料があがりますように。

チン・ブンヒエン（警備 /TRC 補佐）
TRC の利用者が増えるよう、サービス向上を目指してがんばりたい。

ダン・ソン（警備 /TRC 補佐）
JVC が長くカンボジアで活動し、カンボジア人のために手助けしてくれることを願います。

エルサレム事務所（2名）

今野 泰三（現地代表）
活動の質向上と持続的な資金確保を目指し、事業の国際化とローカル化を同時に進めたい。

金子 由佳（現地調整員）
アラビア語で女子トークをしてはしゃぐ。英語の更なる上達も目指す。

気仙沼事務所（4名）

山崎 哲（震災支援現地統括）
甘いもの・カフェイン・ビール・カツカレー・鳥皮をひかえる。

岩田 健一郎（震災支援担当）
絵を描く！

石原 靖士（震災支援担当）
毎日筋トレをする。1年間で500km走る。

伊藤 祐喜（震災支援担当）
ギターの上達！

左から：伊藤、山崎、石原、岩田

スーダン事業（5名）

左から：イスマイル、モナ、サブリ、今井　右枠：サラ

今井 高樹（現地代表）
外国人が知らない地元の有名レストランを発掘してまわる。

モナ・ハッサン（プログラム・コーディネーター）
弁護士の資格を生かして子どもの権利を守るプロジェクトを立案する。

イスマイル・ジュマ（カドグリ事務所チームリーダー）
チームリーダーとして、マネジメントについて勉強したい。

サブリ・アルブフラ（フィールド・オフィサー）
山向こうの鉱山で、金を掘り当てて大金持ち！

サラ・モジョ（フィールド・オフィサー）
語学教室で勉強した英語を上達させる。

ラオス事務所（9名）

後列(6名)左から：フンパン、一人とんでレノール、林、シーサワン、センスリー
前列(2名)左から：オーワンティン、ホンケオ
右枠上から：アロニー、ホム

林 真理子（現地代表）
サワナケートでできるアウトドア的な趣味を見つけ、休みをもっと有意義なものにする！

フンパン（プロジェクトコーディネーター、農業・農村開発チームリーダー）
新しい家に引越し、新生活をスタートさせる！息子が、無事に大学生になれますように！

シーサワン（家畜担当）
もっともっと英語を勉強して、もっともっと英語が上手になりたい！

センスリー（井戸・給水担当）
ブル語は郡によって少し違うので、その違いを学びたい。もちろん、英語も勉強します！

オーワンティン（ラタン植栽担当）
弟が大学に行く学費を支援できるよう、しっかり貯金したい。英語の勉強もがんばる！

レノール（法律研修担当）
英語の勉強に励む。それ以外にも、自己研鑽のためにタイで長期研修を受けてみたい。

ホンケオ（意識啓発活動・自然資源管理担当）
週末に通っている学校を修了する。英語がもっと上手になりたいのでがんばる！

アロニー（会計・総務担当）
ルアンパバンで暮らす65歳の母親とサワナケートで一緒に暮らせるといいなぁ。

ホム（運転手）
娘が高校を卒業でき、息子が政府機関に就職できるよう、父親としてサポートしたい。

南アフリカ事務所（5名）

左から：フィリップ、モーゼス、ドゥドゥジレ、アベル　右枠：冨田

冨田 沓子（プロジェクト・マネージャー）
仕事の遅れを子どものせいにしないように。子育ての手抜きを仕事のせいにしないように。

ドゥドゥジレ・ンカビンデ
（プロジェクト・コーディネーター）
日々の生活を楽しみ仕事にも集中できるように、体調管理をしっかりとしていきたい。

モーゼス・シャバニ（経理担当）
大学に行き直して、経理の上級資格をとること。それで仕事のスキルもアップさせたい。

フィリップ・マルレケ
（プロジェクト・アシスタント）
JVC職員として一年目。事業の目標達成に寄与できるようにがんばりたい。

アベル・コマネ（菜園トレーナー（委託契約））
自分が研修を提供したすべての人たちが菜園を継続できること 。

在タイ（1名）

森本 薫子
（現地駐在員）
JVCってまだタイでやることあるの？
…今だからこそ、やるべきことがあるんです！

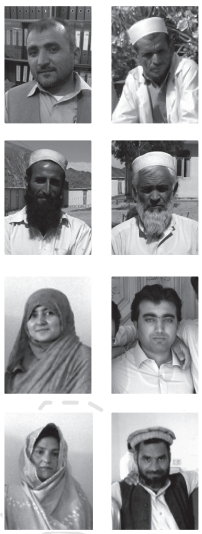
カンボジア事務所（20名）

左から：ネアリー、ソン、ポンロック、チェンガウ、シネン、エン、リッツ、坂本

アフガニスタン事務所（32 名）

後列（10 名）左から：ジャハン・ミール、ロトフル、モハンマド・ナシーム、グラライ、ナビ・ジャン、ジャナット・グル、ライーズ・アフマッド、ミル・ジャマール、ワグマ、ファティマ・カディム
前列（5 名）左から：モハンマド・ラヒーム、ハビブラフマン、シャー・モハンマド、カン・ミール、ファザール・ハク

後列（6 名）左から：デラワール、イサヌラ・カタック、アガ・グル・パチャ、サイード・サファラガ、サビルッラー・メムラワル、アジマール・クラム
前列（3 名）左から：アブドゥル・ラジーク、ザマヌラー・メムラワル、アブドゥル・ワハーブ



右枠上から：モハンマド・シャプール・サフィ、フルシード、アシール・モハンマド、シャハブディン、ワシマ・ババケルヒル、トラブ・ハーン、バスミナ、イザトゥッラー

サビルッラー・メムラワル（治安／総務担当）
人の優しさが持つ力を信じて、平和と教育のために引き続き努力したい。

モハンマド・シャプール・サフィ（医師／医療事業責任者）
今年アフガニスタンにおとずれる様々な課題、挑戦を人々が乗り越えられますように。

アブドゥル・ワハーブ（医師／地域保健責任者）
2014 年の選挙がアフガニスタンに平和と発展と結束をもたらすことを望みます。

ジャハン・ミール（医師／診療所所長）
選挙の後にアフガニスタンに平和が訪れることを望みます。

モハンマド・ラヒーム（診療所看護師）
パソコンの技術を学びたい。

グラライ（診療所検査技師）
アフガニスタンの平和プロセスに国際社会が協力してくれることを望みます。

ロトフル（診療所検査技師）
医療スタッフと運営スタッフ皆が日本を訪れて、研修を受けられますように。

ライーズ・アフマッド（診療所薬局担当）
すべての世界から、特にアフガニスタンから病気が減ってほしい。

フルシード（ワクチン接種担当）
仕事をきちんと行い、良い変化を生み出したい。

ファザール・ハク（ワクチン接種担当）
自分の仕事にベストを尽くし、人々に貢献したい。

ハビブラフマン（診療所守衛）
人々が悲しみではなく、幸福を得られるような仕事をしたい。

ジャナット・グル（診療所守衛）
より多くの人々に貢献し、また診療所を清潔に保ちたい。

カン・ミール（診療所庭師）
今年もよりよい仕事をしたい。

モハンマド・ナシーム（医師／簡易診療所所長）
今年はメッカに巡礼したい。インシャラー（アラビア語で「神が望むならば」）。

ワグマ（簡易診療所助産師）
女性の健康のために働きたい。

ミル・ジャマール（簡易診療所薬局担当）
人生に平穏をもたらす平和な環境で、アフガニスタンが発展してほしい。

アシール・モハンマド（簡易診療所守衛）
村人は JVC の活動に感謝にしており、引き続き支援を望んでいます。

シャハブディン（簡易診療所守衛）
JVC の活動に地域住民は賛同しているということを伝えたい。

ファティマ・カディム（地域保健担当）
新政府が私たちに幸せをもたらすことを望みます。

ワシマ・ババケルヒル（地域保健担当補佐）
これからのアフガニスタンに平和が訪れてほしい。

アジマール・クラーム（教育支援担当）
教育は人生の準備ではなく人生そのものなので、教育に貢献し、人生に貢献したい。

サイード・サファラガ（調達／総務担当）
農業の分野に貢献をしたい。

イサヌラ・カタック（経理担当）
アフガニスタンの人々の命を救うために、血液バンクを立ち上げたい。

トラブ・ハーン（経理補佐）
人々がどう平和の中で生きているか、世界を見てみたい。

バスミナ（調理担当）
仕事を続け、子どもたちを健康に育て、彼らのより良い未来を祈りたい。

デラワール（守衛主任）
常に幸福でありたい、そして仕事をきちんとやりたい。

イザトゥッラー（守衛）
いつか日本を訪れたい。

アブドゥル・ラジーク（守衛）
パソコンを学んで、子どもたちに教えたい。

ナビ・ジャン（守衛／運転手）
自分の仕事にベストを尽くしたい。

アガ・グル・パチャ（守衛／運転手）
神にとって幸福な 1 年になりますように。

ザマヌラー・メムラワル（守衛／運転手）
子どもたちへの教育、国への貢献、日々の仕事の充実、この 3 つを行いたい。

シャー・モハンマド（運転手）
アフガニスタンが平和になり、子どもたちが調和の中で学ぶことを望みます。

平和主義を損なう ODA に変えてはいけない

調査研究・政策提言担当　高橋 清貴

今回はこれまでのプロサバンナ事業から離れて、昨今の日本の ODA 大綱の見直し議論に関して、以前から ODA に関して外務省との議論を続けてきた視点からその問題点を指摘する。（編集部）

■国益のためのＯＤＡへ？

ＯＤＡ大綱見直し議論が進んでいる。秘密保護法、武器輸出三原則緩和、国家安全保障会議設置と集団的自衛権など、焦臭い議論が続く中、ＯＤＡの最上位政策である大綱が十一年ぶりに書き換えられる。ある外務省幹部は、現行大綱は「バランス良く書かれている」ものの、減少し続けるＯＤＡ予算を前に議員と財務省と国民の理解を得るためにはもっと国益を前面に出さなければならないと宣う。今回は「見直し」であって、「制度変更などを含む『ＯＤＡ改革』ではない」とも言う。文言をいじって解釈の幅を拡げ、国益との結びつきを強めつつもソフトに見せようということのようだ。しかし、ＯＤＡの「憲法」とも言える文書から制約的な要素をはずし、時の為政者による「政策的判断」に預ける幅を拡げれば為政者の権力ばかりを拡大させることになる。ＯＤＡ予算を増やしたい外務省の思惑は、そういう為政者の権力欲と「国益」で一致する。しかし、そこに共通する日本側の「都合ばかり」という本質を、途上国の人々やまともな先進国は早晩見抜くであろう。

■国際社会との平和共存を目指すためのＯＤＡのはず

ＯＤＡの根拠は、憲法前文にある。「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。」私たちの平和は、国際社会と共にある。この「平和共存」に向けて、国際社会の格差や貧困問題に取り組むために税金を使うことを、われわれ「主権者」が政府に委託しているのがＯＤＡである。一部企業を儲けさせるようにＯＤＡを使ったり、ＯＤＡで国際社会に武器を広め、他国との緊張関係を高めるために使うことを許した覚えはない。もし、一部の威勢のいい為政者や国民の声だけに従って国益を前面に押し出せば、平和憲法の下で築いてきた理念は蔑ろになり、明らかな「主権者」に対する裏切りとなるだろう。

ＯＤＡ大綱見直しは、八名の有識者からなる「ＯＤＡ大綱見直しに関する有識者懇談会」（有識者懇）を中心に三月から議論が進んでいる。メンバーの一人にＮＧＯ側からＪＡＮＩＣ理事長の大橋氏が入り、議事要旨も外務省ウェブサイトに掲載されているものの、会議自体は一般には公開されていない。有識者懇はこれまで三回開催され、次回（六月中旬）を最後に、報告書が出される予定である。

一方、ＮＧＯもＯＤＡ政策協議会の枠組みを使って、東京と大阪で外務省の局長、審議官や担当課長（政策課）と意見交換会の場をつくり、市民に開かれた場をつくってきた。ＯＤＡの軍事利用に関しては、この意見交換会での担当課長の話と、これまで公開された議事要旨や大橋氏からの報告を総合すると、ＯＤＡの「平和主義理念」は維持するが（したいが？）軍との「一体化」は進める（その形態は多様）。歯止めは「政策的判断」に任せる、とのようである。「一体化」の程度は「政策的判断」に任せる、ということだ。これが本当に歯止めになるのか、極めて心配だ。

■政策的判断ではなく原則に基づいた運用を

こうした懸念に基づいて、ＪＶＣやＯＤＡ改革ネットを含む六団体が呼びかけとなって「四原則堅持」を求める市民声明を作成し、五十団体の賛同を得て、安倍首相、岸田外務大臣に送った。ＯＤＡ大綱、とりわけ「四原則」は、大綱が一九九二年に制定されて以来、二十年以上一度も変えられずにきた部分だ。続いてきたのには理由がある。そこに世界人権宣言や国連憲章などに通じる普遍的価値観と、日本の平和主義理念が具体的な運用規則として書き込まれているからだ。実際、この「原則」のお陰で、九・一一以降のアフガニスタンやイラク戦争でも、ＯＤＡを武力行使とは距離をおいて抑制的に使うことで平和主義理念を大きく踏み外さずにいられたのである。日本は、「非軍事の原則」を「矜持」とするからこそ、諸外国から信頼されているのだ。

自らこの矜持をかなぐり捨てることのコストは決して小さくないだろう。軍と民生（ＯＤＡやＮＧＯの活動）との境界が曖昧になれば、私たち国際協力ＮＧＯに向ける現地の人々の視線も厳しくなるであろう。ＯＤＡもＮＧＯも、「国際協力」という名目で他国に対するソフトな「介入」である点で同じだ。現地の人々に対する配慮を失った時、「介入」は「侵略」に変わる。武力（ハード）を伴った「介入」ツールにＯＤＡが変わってよいのか。もっと議論が必要である。

※注①・外務省ウェブサイト「政府開発援助（ODA）大綱の見直しについて」→ http://ngo-jvc.info/1hNnjcB
※注②・「ODA 大綱 4 原則における「非軍事主義」理念の堅持を求める市民声明」→ http://ngo-jvc.info/1stg76x
※注③・外務省ウェブサイト「政府開発援助大綱」の II. 援助実施の原則　→ http://ngo-jvc.info/SM4omJ

スタッフのひとりごと

日本人は「外国人」？

JVC カレンダー事務局　大村 真理子

イラスト　かじの 倫子

小学校時代はシンガポールで過ごしました。年中真夏、赤道直下の多民族国家。日本のお正月が過ぎればすぐ中国のお正月が始まり、毎日イスラムモスクで礼拝する人もいれば、体中に針を刺した人の行進（タイプーサムというヒンドゥー教のお祭り）が始まる日もあり。毎日真っ黒に日焼けし、誰が１番黒いかを競い合う、そんな日々でした。

何気なく母に言った事があります。「シンガポールには外国の人が沢山いるね」。それに対して母が一言、「何言ってるの、あなたもここでは“外国の人”でしょ」。

当時の私と言えば、“日本人”はどこに行っても“日本人”で、それ以外の人が“外国人”。なのにどうして“日本人”である私が“外国人”になるのか？母の言うことがまったく理解できず、数日かけて説明してもらい、ようやく「日本や日本人を主体にして考えるのではなく、その土地や人を主体にして考えること」そして「私は日本人であり、外国人でもあること」を理解したのです。子どもながらに「世界は広いのに、自分は随分狭い考え方で過ごしていたんだなあ」と感じたのを覚えています。

国内、国外と転勤の多い幼少期でしたが、毎日多様な文化に触れ、母の教えである「その土地ならではのことを楽しむ」をモットーに過ごしたあの日々が、「世界と広くつながる仕事がしたい」と JVC に飛び込んだ、今の私に影響しているのかも。そんなことを感じる今日この頃なのでした。

みるよむきく

『いわきノート』

製作：筑波大学創造的復興プロジェクト／日本／ 2014 年／ 86 分

「それは、（市外に）出て行けない市民の現実があるからですね」これは、映画『いわきノート』のなかで福島県いわき市内の保育園の園長先生が、なぜ原発事故の影響が少なくないこの地で保育園を開園し続けるのか、という主旨の質問に答えたものだ。

この映画は、東日本大震災から二年半後にいわき市で開催された「未来会議 in いわき」というイベントに参加した筑波大学の有志などによって制作されたドキュメンタリーだ。この会議に参加したいわき市の住民へのインタビューを重ねていく。

船と引き換えにした形で娘を失った漁師、地震で崩れた墓石を見つめる住職、作物が売れなくなってしまった農家、「初代フラガール」のみなさん（いわき市は映画『フラガール』の舞台でもある）、震災後の被害情報の伝え方に悩んだラジオＤＪ、そして冒頭の保育園の園長先生などなど、登場するのは私たちと同じごくごく普通の人たちだ。

もちろん、カメラを前にしては言えないことも少なからずあるだろう。震災後、普通の人が抱えるには重すぎる荷物を、否応なく背負わされた人たち。震災後に何度も何度も頭のなかをめぐってきたであろう事柄を、ある人は少しずつ、またある人は自分に向かって吹っ切らせるようにあるいは言い聞かせるように、言葉にしていく。みな生きている最中で、結論など出せようはずがない。

復興に一丸で、なぜ避難しないのか、◎◎は風評被害だ、一度避難したくせに――。震災後の状況を巡っては様々な人が様々なことを言う。しかし、困難の中を生きるなかですがるようにしているその人の心の指針を、「科学的に正しくないから」また逆に「臆病者」という一言で赤の他人が否定して、はたしてそれがなんになるのだろうか。冒頭の言葉をおっしゃったときの園長先生の顔は、ハッとするほど意志が強く、しかしやさしく落ち着いていた。子どもたち（＝私たちの未来）と日々向き合う方の言葉に、震災後を生きる私たちが対面すべきものを改めて教えられた思いだ。

（事務局次長　細野 純也）

■この映画はみなさんで自主上映していただくことが可能です。詳しくは
筑波大学ウェブサイト内のページをご覧ください。→ http://ngo-jvc.info/1120f9k

JVC は、現在 9 の国 / 地域と東日本大震災被災地で活動しています。

南アフリカ

■絵本を手に絵顔を見せる子どもたち。

■HIV/エイズ(リンポポ州)

4 月 1 ～ 3 日の学校休暇を使い、昨年開始した子どもの世帯調査を継続して実施した。また、子どもケアセンターには絵本が寄贈され、休み中の子どもたちが早速本を手に取る姿が見られた。

4 月下旬から、菜園ファシリテーターによる研修を本格的に開始した。地域の中で菜園活動を積極的に続けてきた人たちをファシリテーターとして昨年から育成。今度は彼らが地域住民に菜園の指導をし、活動を広めていくことを目指す。5 月 1 ～ 2、15 ～ 16 日には計 12 名を対象とした研修を実施し、その後参加者の各家庭で菜園設置のための個別指導を始めた。

4 月 14 ～ 15 日には、リンポポ州大学の招きで、栄養調査の研修に JVC スタッフが参加した。この研修は、今度同大学と協同して実施する予定の栄養調査と研修の準備として行なわれた。(冨田)

タイ

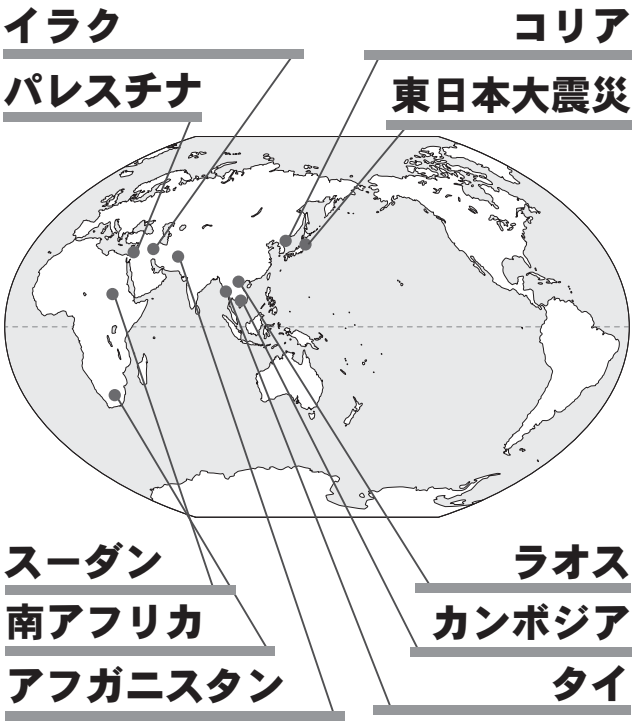
■ビルマ人労働者への健康教育を通して、病気・怪我の予防を啓発する。

■農村派遣研修

タイの農村で学ぶインターンシッププログラムは、9 月開始に向け、14 期生の募集を始めた。日タイ若手農民交流では、13 年度までタイの若手農家を招聘し、福島原発事故の影響と日本の新規就農者との経験交流を実施してきたが、14 年度はタイ人の学びがタイ社会のなかでより効果的に発信されることを期待して、タイの原発建設候補地周辺に住む住民のほか、NGO のシニアスタッフを数名招聘することにした。

■南タイでの医療支援活動

タイ南部パンガー県でビルマ人労働者に対して、救急医療支援、健康教育、健康保険証発行などの医療支援をしている。当期間では応急手当、デング熱、結核などについての健康教育研修を 17 回実施し、10 のコミュニティから 328 名が参加した。診療所では 200 名の患者を治療した。現地の体制変更により、JVC が支援している地域保健員がより重要な役割を担っている。(下田)



ラオス

■ラタンの発芽研修に参加する村人たち。

■森林保全／農業・生活改善事業（サワナケート県）

農業支援活動では、3 月に牛銀行を導入した 2 村で、栄養剤の調合研修を実施した。4 月上旬には、食用および販売も可能なラタンの発芽研修を 2 郡 3 村で実施した。また、4 月から 5 月にかけて SRI（幼苗一本植え）雨季作の実践希望者調査を全村で実施した。ラオスは、6 月から雨季に入るので、雨季に突入する前の 3 月～ 5 月にかけて、計 8 基（大 5 基、小 3 基）の深井戸を掘削した。掘削後、サンプル水を取水し、水質検査も実施し、すべて合格した。

森林活動では、3 月下旬に、共有林の設置を検討している 6 村 12 人の村人および県・郡の行政官を対象に、GAPE という NGO がチャンパサック県で設置したモデル共有林を見学するスタディツアーを実施した。参加者は共有林の成功例に関心を持ち、現在、参加者の対象村で、共有林設置を前向きに協議している。また、アサポン郡の村で魚保護地区の設置準備も進めた。魚保護地区を設置する川がサワナケート県とカムワン県の県境となっており、カムワン県側の村でも、魚保護地区の設置目的などを説明した。(於勢)

東日本大震災

■土地造成まで終わっている南三陸町の移転先を見学、先行事例としてお話を聞いた。

■鹿折地区での復興支援（宮城県気仙沼市）

3月16日、旧浦島小学校にて外部の専門家を招き、廃校施設の活用やまちづくりに関する先進事例を学ぶとともに、「四ヶ浜のこれまでとこれから」について語り合うワークショップを実施した。3月22、23日には、養殖作業体験や住民との交流を通じて浦島地区の魅力や気仙沼の現状を伝える第2回気仙沼ツアー企画を実施し、12名の参加を得た。

4月27日には、すでに完成している他地域の防災集団移転団地の見学会を開催し、住民約30名が参加した。3月28日には、災害公営住宅入居後のコミュニティづくりを見据えた「鹿折いきいきクラブ」を実施し、参加者たちはニュースポーツを楽しみながら交流を図った。（石原）

■災害FMと仮設住宅サロンの運営支援（福島県南相馬市）

福島県南相馬市で、地元団体「つながっぺ南相馬」共同で仮設住宅4ヵ所におけるサロン活動を継続中。桜の季節には各仮設自治会で花見が催されるなど、住民主体の活動が行なわれた。また、今春開設した住民の運動不足解消を目的とした一坪菜園では、植え付けが行なわれた。

地元NPO「みんなのとなり組」と共同で「こころのケア連絡会」を立ち上げた。仮設住宅のケアに関わるアクター間の連携を作ることが目的。第1回会合を5月に開催した。（白川）

カンボジア

■小学校の先生を対象にして、ゴミ管理研修を実施した。

■生態系に配慮した農業による生計改善（CLEAN）

これから木本（多年生で食べられる植物）菜園を実施するモデル農家へ年間を通じて野菜を育てられるよう、溜め池・井戸の支援を行なった。また、今後の活動の方向性を探るべく、スタッフを対象としたタイへのスタディーツアーを実施した。

■環境教育（EE）

小学校の先生を対象にして「ゴミ管理研修」を実施した。これは、ゴミの種類によって分別して処理することの利点と、その背景にある地域の自然環境への配慮といった考え方を伝えるもの。これに関連して、村の小学校や地域住民、地方行政職員と協力し、ゴミ清掃イベントを開催するなど、ゴミの削減に力を入れている。また、学校の先生や児童が森や近くの自然から木の種を収集し、学校で苗木づくりを始めている。

■資料・情報センター（TRC）

これまではプノンペンで持続的農業、農村開発、環境に関する資料を提供していたが、農家が農業の情報にアクセスできるよう、シェムリアップの活動地でも地域資料センターの開設支援を行ない、センターの建設が一部完成した。

■技術学校

プノンペンにある職業訓練校と整備工場の運営支援をしている（経営自体はすでに独立している）。訓練校1年生は、ハンマーやドリルの使い方等の基礎技術を学習した。（坂本）

コリア

■西宮ではユネスコ世界児童画展の場でともに展示された。

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

◎国内展

2月の東京展以降も、国内での貸出展示を各地で行なっている。3月には西宮市、4月には、都内大田区、国立市、さらには熊本市などで展示会が開催された。今後、6月中旬には茨城展（茨城県立県民文化センター県民ギャラリー）が予定されているほか、他の地域からの貸出希望も随時受け付けている。

◎事業協議

今年度の『南北コリアと日本のともだち展』企画を、実行委員会での協議を行なっている。この数年韓国、朝鮮、中国などと共同制作を行なってきたが、絵画展の開催も視野に入れながら、子どもたちの絵とメッセージの交換をより活発化させ、東アジア地域の市民同士がお互いを身近に感じられる場を多く設けていく。（寺西）

スーダン

■住民リーダーと井戸掘削の候補地を確認するJVCスタッフ。

■紛争による避難民・難民への支援

紛争が続く南コルドファン州の州都カドグリ周辺で、戦闘を逃れて流入した避難民と地元住民に対する支援を実施している。

乾季の菜園づくりの活動は、新たに2つの集落で研修を実施、1月に活動を始めてからの参加者は合計400家族を超えた。野菜類の収穫は順調で、聞き取り調査によれば、家庭で食卓に上るほかに市場で販売して1家族あたり平均で毎月200スーダンポンド（約3,500円）程度の現金収入を得ている。4月から新事業地であるリフ・アシャギ郡（カドグリ郡の北隣）で給水支援のための調査を開始。避難民の受け入れ地区を中心に井戸掘削の候補地を選定している。

3月以降、州内では政府軍が兵員を増派、反政府軍への攻勢を強めている。州東部では戦火を逃れて1万人以上の避難民が発生している。引き続き注視する。（今井・佐伯）

パレスチナ

■昨年より健康教育が上手になったボランティアさん。

■子どもたちの栄養改善支援（ガザ地区）

4 月からは去年の対象者に加え、新規支援対象者への家庭訪問などを開始した。5 月までに 273 件の家庭を新たに登録し、179 人の子どもの栄養状態検査を行なった。また、29 人の妊婦がカウンセリングを受け、6 ヵ月以内の乳幼児を持つ母親 2 人が産後ケアカウンセリングを受けた。事業地は昨年に引き続きガザ北部のビルナージャで、今年度からは、3 つの幼稚園で子どもたちを対象とした衛生教育セッションも開始している。

■学校保健・健康教育・巡回診療支援（東エルサレム）

4 月中、3,976 人の子どもと 122 人の母親に対し、243 回の健康教育を実施。地域青年に対する救急法講習を 31 回開催したほか、保健委員会の生徒に対して 12 回のトレーニングを実施。去年設立した保健委員会の生徒が、文化祭での健康診断や、小学生対象の健康教育を行なった。孤立した村落では、11 回の巡廻診療を行ない、174 人を診断・処方した。現在、これまでの事業の効果を客観的にはかるため、中間評価作業を実施中である。

■政策提言

4 月中旬、東京でのトーク・イベントにて、今野がパレスチナでの子育て事情や現地の活動を紹介。定員を越える 30 人が参加した。また、5 月 10 日付の北海道新聞の記事「揺らぐ日本の中立－中東で活動する NGO が懸念」に、武器輸出緩和など安倍首相が進める「積極的平和主義」がパレスチナに与える悪影響について、今野の意見が掲載された。

（今野・金子）

アフガニスタン

■マラリア対策キャンペーン中の家庭訪問。

■女性と子どもの健康改善のための地域保健医療事業

村ごとに長老たちが地域の健康向上に取り組む「保健委員会」の活動の一環として、マラリア患者が増えてくる時期を前に、自主的に対策キャンペーンを行なった。長老たちがボランティアを選出して村の家々を周り、マラリアの感染状況を調査し、患者発見に貢献した。これまで 2 つの村で先行されて徐々に組織化が進んできた保健委員会だが、この期間中、別の村で 3 つ目の委員会が立ち上がった。また、地域の健康向上 / 病気予防に対する村の女性たちによるグループ活動に関して、同様の施策が新しく公共保健政策として導入されたこともあり、まずはそのメンバーが活動地の村で選出された。

■教育支援活動

教員同士の学び合い「研究授業」を活動地の男子校で 4 月に実施した。1 月の来日時に日本の小学校での研究授業を参観した担当者は、そこで得たアイディア（異なる色のポストイットを用いて気づいた点を挙げる）を今回のワークショップで実践した。また、今回は外部講師の力を借りることなく教員自身のみで行なった。

■政策提言

これまでもセキュリティや政策提言を担当してきた職員が、現地の代表的なネットワーク NGO “ACBAR” の運営委員に選出され、定期的にカブールで開かれる会議に出席し、全国レベルでの政策提言に関わることになった。（加藤）

調査研究・政策提言

■第 15 回開発協力適正会議（4 月 22 日、外務省）

今回の会議では特に「ボリビア・オキナワ道路整備計画準備調査」に集中的にコメントした。戦後、米軍に土地を接収された沖縄の農民たちがボリビアに移住したが、彼らの居住区の道路整備を ODA で行なうという。委員には賛成する声を多かったが私は反対した。植民地主義に反対する先住民の抵抗運動があるからだ。むしろ、オキナワ道路は彼らを喜んで受け入れてくれたボリビア政府が行ない、そのことに感謝する日本がボリビアの別の支援要請にしっかりと応える。それこそが適切なパートナーシップであろう。

■ ODA 大綱 4 原則の堅持を求める声明の記者発表（5 月 13 日、参議院会館）

本誌 9 ページに書いた市民声明の記者発表を、HRN 伊藤氏、アジア太平洋女性資料センター田中氏、JVC 代表谷山と共に行なった。NHK を含め数社の参加があった。（高橋）

イラク

■非暴力トレーニングでは参加者間の「意識の違い」を確かめるアクティビティも。

■「平和の創り方ワークショップ」を開催

イラクでの「子どもたちとつくる地域の平和ワークショップ」を支援する中、日本でも平和や非暴力を考えるためのワークショップを計画。3 月 23 日に 1 回目としてアーユス仏教国際協力ネットワークとの共催で、新潟国際情報大学の佐々木寛先生をお招きし、参加者約 20 名とスタッフ約 10 名が、約 3 時間の「非暴力トレーニング」を体験した。

■白血病患者への医療支援

イラク戦争前後から実施してきた医薬品等の支援活動の報告書を作成した。JVC の医療支援活動は 2013 年度をもって終了し、今後は引き続き JIM-NET の一員として関わっていく。（谷山由・池田）

国内ひろば

JVC network

会員登場！ 53

JVCの恩恵を皆様とともに

〈千葉県〉山田 とし子

JVCの会員になり二十年が過ぎました。栄養失調でお腹が膨らんだ子どもたちの姿を見て、JVCに駆け込んだのが高校生の頃。国際協力がしたくて看護師資格を取得しましたが、海外で支援活動をするには至りませんでした。

◎

初めて訪問したカンボジアは国際協力ではなく観光客としてですが、不思議な体験をしました。

ホテルのスタッフがバイクでアンコールワットを案内してくれたのですが、私を案内してくれたC君が看護学生の頃に担当した患者さんにそっくりだったのです。一緒に旅行した友人がその患者さんを憶えていて、私よりも彼女のほうが驚いていました。その患者さんは若くして亡くなられたのですが、JVCのように私にモチベーションを与えてくれた方なので、アンコールワットでの再会（？）は励みになり、感慨深かったです。

それからもうひとつ。今までできなかった泳法が、一瞬でできるようになりました（私だけでなく友人も！）。プールで泳ぎながら思いました。「これはJVCの恩恵かもしれない…」と。

日本で暮らしていると気がつかないことばかりなのですが、トライアル&エラーを読むと、日常生活での視野の狭まりや、暮らしに閉塞感を覚えるようなカルチャーショックを受けます。

今まではそれが心地よい気づきでしたが、最近は緊張感を伴います。三・一一以降、原発や被災地の情報を得るために、私はインターネット市民メディアのIWJ（※注①）を活用していますが、JVCのご活躍もIWJで拝見する機会が増えました。JVCは現実に根ざした視点から離れないので、厳しい状況にあっても次の歩みの示唆があり勉強になります。IWJで提供される集会でのスピーチや講習会の動画は、他にも憲法や特定秘密保護法、TPPなどさまざまです。JVCの取り組みもタイムリーに共有できますので、会員の皆様も一度IWJをご覧になってみてはいかがでしょうか。私も自分の足元の出来事に参加していかなくては、と気持ちを新たにしています。

新スタッフ紹介

◎今回紹介する三名は、全員が東京事務所インターン出身です。

太田（おおた） 華江（はなえ）

カンボジア事務所 環境教育担当

二〇一〇年にJVCで広報インターンをしました。その後は大学院に進学しましたが、卒業後、現場にとても近いところで活動ができることに魅力を感じ、昨年七月からJVCカンボジアで現地インターンに、春からは正式にスタッフとなりました。カンボジアの農村は貧しいですが、沢山の知恵があります。その知恵を次世代へ伝えたり、村には無いアイディアを提供していけるよう、日々学びながら現地のスタッフと共に活動していきたいと思います。

大村（おおむら） 真理子（まりこ）

東京事務所 カレンダー事務局

幼少期はバングラデシュやシンガポールなど、東南アジアで過ごしました（本誌十ページ「スタッフのひとりごと」も参照）。自然と世界の文化を意識することが多くなり、当時の経験が今の私を作っていると感じます。昨年一年、広報インターンとして活動し、ご縁があって四月から職員となりました。カレンダーを通じてJVCに興味を持ち、関わってくださる方を増やしたい。収益を増やして活動資金につなげたい。営業、広報活動に全力で取り組みます。

横山（よこやま） 和夫（かずお）

東京事務所 震災支援担当（気仙沼）

宮城県仙台市出身です。一般企業で技術者として勤務しておりましたが、東日本大震災により自分が生まれ育った地域が被災し、そこに暮らす人々が困難に直面する様子を目の当たりにしたことから、震災復興に関わりたいと考え、紆余曲折の末JVCにたどり着きました。昨年度は週二日のインターンでしたが、スタッフとなった四月からは、新宿はゴールデン街から山梨の韮崎市まで毎週末飛び回る日々に。これまでの経験も活かしながら務めてまいります。

※注①・Independent Web Journal。http://iwj.co.jp/
JVC 関連のページは、集団的自衛権→ http://ngo-jvc.info/1h1Sbp3、ODA 大綱見直し→ http://ngo-jvc.info/1nJktYC、パレスチナ関連→ http://ngo-jvc.net/1rFhcv9 など。

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金（郵便振替）

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC 東京事務所

3 月計　1,745,021 円
4 月計　521,000 円

	3 月	4 月
無指定	141,515 円	7,000 円
タイ	0 円	0 円
カンボジア	330,000 円	95,000 円
ラオス	6,000 円	304,000 円
南アフリカ	0 円	0 円
パレスチナ	262,480 円	3,000 円
アフガニスタン	468,500 円	12,000 円
コリア	0 円	0 円
イラク	80,000 円	0 円
スーダン	200,000 円	100,000 円
東日本大震災	256,526 円	0 円

※上表には「夏 / 冬の募金」は算入していません。

②犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

1 月計　38,500 円 / 9 件
4 月計　50,000 円 / 3 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としできる手軽な募金方法です。

3 月計　2,235,200 円 /1,914 件
4 月計　2,252,700 円 /1,927 件

編集後記

さぁワールドカップ。開幕前の雰囲気は、4 年前の「絶望感」よりも 8 年前の「根拠の薄い楽観さ」に近いかも。「優勝」と口にして優勝できるのならば苦労はしないが、口にしなければ真には目指せない。次の「頂」を見据えるところまで本当にわれわれは登ってきたのかどうか、悲観せず楽観せず、今はザッケローニと代表選手たちが 4 年間積み重ねてきたものを信じるのみ！ (H)

2014 年度東京事務所インターン紹介

今年も昨年に引き続き 9 名のインターンを受け入れています。
イベントなどで見かけたら声をかけてください。

左側後列左から：林、橋本　前列：間瀬、野間口、工藤　右側後列：澤、前列：稲垣、金子、佐藤

金田 奈生子（かねだ なおこ）（ラオス事業）
農業支援を行なっている NGO でのインターンを探している時に偶然見つけたのが JVC です。この一年で、JVC の事業に関して理解を深め、外部イベントなど、JVC のためになるアクションを起こしたいです。

工藤 萌生（くどう めぐみ）（広報・会員）
興味を持ったらとにかくトライするのが私のモットー。映画の影響で国際協力の分野に興味を持ち始めていた時、偶然 Twitter でインターン募集を発見したのです。アットホームで尊敬できる方々ばかりのこの環境で、JVC の輪を自分なりのカタチで広められるよう精進します！

佐藤 久実（さとう くみ）（アフガニスタン事業）
数々の紛争を経験し、今も民族問題や男女格差など様々な問題を抱えるアフガニスタン。そこに外部からどう平和構築に関われるのか、NGO を通して学べたらと思います。インターンを始めて 2 ヵ月弱、アフガニスタンの雄大な自然や人々の暮らしに魅力を感じ始めています！

澤 康帆（さわ やすほ）（ホームページ）
大学 2 年生時の大学の講演会に JVC スタッフの方が来てくださったことがきっかけで、JVC 事務所での勉強会にも参加。JVC は私にとって 1 番メジャーな NGO でした。自分がこれからどのように国際協力、NGO に関わっていけるのか様々な道を模索したいと思っています。

竹田 響（たけだ ひびき）（気仙沼事業）
私は平和構築と人道支援の分野に関心を持っていますが、震災復興にも大学入学時から携わっています。気仙沼事業はもちろんですが、インターン活動を通して JVC の事業すべてを学びたいと思っています。

野間口 智美（のまぐち ともみ）（会計）
数字とは無縁でしたが、会計インターンに。国際協力に関わりたい思いが実現してうれしい反面、とにかく数字とは無縁の人生だったので、まずは数字に強い女になることが目標です。頑張ります！

橋本 貴彦（はしもと たかひこ）（パレスチナ事業）
人生が折り返し地点を迎えたと直感した今年、一念発起で仕事を辞めて JVC に来ましたが、自分の勘に正直でほんとに良かった！ 同期の若いインターンやスタッフの皆さんから毎週刺激を受けています。

間瀬 寛子（ませ ひろこ）（カンボジア事業）
JVC は、おしゃべり大好きなスタッフさんたちの笑い声に溢れ、お菓子食べ放題のとても素敵な所。国際協力についてはまだまだ初心者なので、現地訪問や沢山の人と出会って充実した 1 年にしたいと思います！

稲垣 美帆（いながき みほ）（アフリカ事業）
大学の授業で JVC 職員のお話を聞いた際、国際協力に対するプロフェッショナルな姿勢と住民の自立性を尊重する考え方に感銘を受けました。国際協力を軸にして生きると決めたものの日々悩んでおり、憧れたプロの職場で一緒に働いてヒントを得たい！その一心で応募しました。

JVC ウェブサイト 会員専用パスワード（2014 年 7 月～ 8 月）：
b9CW8v7m5T

JVC ウェブサイトから T&E のバックナンバーをダウンロードするときに必要です。

Trial & Error（試行錯誤）三〇九号　二〇一四年六月二十日発行（通巻三百九号・隔月二十日発行）
発行人＝谷山 博史
編集人＝大野 和興・長谷部 貴俊
編集スタッフ＝細野 純也
発行＝日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒一一〇-八六〇五 東京都台東区上野五-三-四 クリエイティブOne秋葉原ビル六階
電話（〇三）三八三四-二三八八　FAX（〇三）三八三五-〇五一九
印刷＝ベスト・プリンティング
定価＝五〇〇円（税込）

近刊のお知らせ

戦争の現場で考えた
空爆、占領、難民

カンボジア、ベトナムからイラクまで

熊岡 路矢 著

予価 1,900 円＋税

1980 年、戦争で破壊されたインドシナ（カンボジア、ベトナム、ラオス）からの難民への救援活動のためにタイに入り、JVC の活動に参加した熊岡路矢前代表理事（1995-2006 年）の最新著書が、6 月末に刊行されます。インドシナ半島での活動以降も、イラクやパレスチナ、アフガニスタンなど紛争地に足を運び続けた著者が、そこで出会った印象的な人びとや出来事を生き生きと描き出しています。

■内容
- 約 30 年の紛争地体験を振り返る
- 9.11 から米国の戦争へ―アフガニスタン戦争
- イラク戦争の現場と私たち
- 日本の戦後と占領
- 混乱のインドシナ半島で―難民救援、人道支援
- 『カンボジア最前線』後の 21 年

ご注文・お問合せは、彩流社（東京都千代田区富士見 2-2-2、TEL03-3234-5931）にお願いいたします。

JVC Japan International Volunteer Center

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980 年 2 月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVC の活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志で JVC に参加し、活動を継続してきました。JVC はボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVC の方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年 6 回この会報誌と年次報告書をお届けします。

◎一般会員　10,000 円
◎学生会員　5,000 円
◎団体会員　30,000 円
※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西へ。　→ miyanishi@ngo-jvc.net

会員数（6 月 2 日現在）　合計 1,094 名
（正会員 550 名、賛助会員 544 名）

■オリエンテーション（説明会）にお越しください。

JVC の活動内容をご紹介しています。お気軽にご参加ください。
会場は JVC 東京事務所、参加費は無料、予約不要です。
◎第 1 月曜日午後 7：00 － 8：30
◎第 2・第 4 土曜日午後 2：00 － 3：30

■ E-mail
info@ngo-jvc.net

■ウェブサイト
http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」（古紙 90%、間伐材パルプ 10%）で作成しました。